

夏休み、売り切れました



東江一紀

わたくし、ただ今、夏休みをいただいております。

っていうせりふを、一度吐いてみたかったんだよなあ。

この「お休みをいただく」という言いかた、昔からあったんでしょうか？ 個人的な記憶をたどれば、頻繁に耳にするようになったの

は、ここ五、六年のことではないかという気がする。

ひょっとすると、自分が夏休みを取れなくなったところから、急に耳につき始めただけのことかもしれないけど……。

よくあるパターンとして、編集者からゲラを渡され、「×日までにお願います」などと

言われる。それで、数日前に電話してみると、べつの編集者が出て、「〇〇は夏休みをいただいております、×日に出社いたします」と答えるのね。

ほっほう、上等じゃないの。いったい、誰からいただいたんだよ、その休み。わたしやあげた覚えなんか無いぞ。

とまあ、休まず働いている側からすれば、絡みたくもありませんわね。形は謙讓表現だけど、誰に対してへりくだっているのが判然としない。

字義どおりに解釈するならば、「事後承諾ではありませんが、あなた様のおかげをもちまして、のうのうと休暇を過ごしております」というようなことになるでしょうか。

いや、需給関係をもっと突き詰めてみれば、「自由業者であるあなた様が、無給の夏休みを返上して働いてくださるおかげで、給与生活者であるわたくしは有給の夏休みを存分に楽しめます。かたじけないっす」というようなことになるのではないか。

いや、いや、場合によっては、「おめえらは、休んだら仕事が止まっちゃうけど、おれっちの場合、会社の歯車はちゃんと動いてるんだよ。ま、おめえのぶんまでおれが休んでやっから、しっかりと働きな」というような侮蔑すら含まれているかもしれない。

いずれにしろ、何社かの編集者に夏休みを
いただかれたりすると、こちらの手持ちがな
くなってしまふのは道理ですわな。

—というしで、ここ数年間というもの、
わたしの夏休みは、用意するはしから編集者
たちにいただかれてしまい、断片も残らない
ありさま。

妻子までが、「お暇をいただきます」などと
言つて、里帰りする。

おい、おい、なけなしの「お暇」まで持つ
てかないでくれよお！

—だけど、今年は違います。横浜ベイスター
ズが三十八年ぶりの優勝に向かって邁進して
いるのだ。冬季オリンピックでも、二十六年
ぶりに金メダルが取れたのだ。わたしだって、
五年ぶりの夏休みを取らずにはおるものか。

—と、気張るほどの話ではない。今までさん
さん他人に提供してきた休みを、ほんの少し
自分用に取り分けようつてだけじゃないの。

—なのに、ああ、いたいけな中年翻訳者の胸
は、えれえ悪事にでも手を染めるかのように、
どぎまぎと罪悪感に震えるのであった。

—だってねえ、仕事はずつと遅れればなしだ
し、誰かが「休んでいいよ」と言ってくれた
わけでもない。休暇願など提出する先もなく、
ただ自分で決めて、自分で休むんだもの。も
ちろん、無給。

—だいじょうぶかなあ。どこかの編集者が、
許可証でも発行してくれないかなあ。ついで
に、ぼんとおこづかいでもはずんでくれな
いかなあ。

—と、われながら情けない葛藤を経た末に、
よし、ほんとに休もう、と腹をくくり、撤回
はしないぞ、と肝を据え、ほんとにほんとだ
からな、と虚空に吠え、そのうえで、編集者
軍団に向かって、「こ、今年は、な、夏休み、
取りますからね」と宣言した（おい、おい、
声がひっくり返つてるよ）。

—ところが、なんと、これだけの手続きを踏
んで、必死の思いで決意表明をしたというの
に、敵はみんな、「あ、そう」という反応しか
見せない。

—もっと驚いてくれよお。いさめてくれよお。
五年ぶりなんですよ。遅れに遅れた仕事を、
放り出して遊ぶんですよ。

—あゝあ。肩透かしを食つたように、あつけ
なく休みが取れちゃいました。さあ、勤勉に
遊ぶぞおつ！

—と、このあと、わたしは久々に郷里の沖繩
へ帰り、至福の十日間を過ごすであります
るが、ここまで書いたところで、たいへんな
ニュースが飛び込んできました。

—昨日（八月二十六日）夕刻、タトル・モリ
エイジェンシーの森社長が亡くなった、と。

—こんなおちやらけた文のなかに書くのは気
が引けるのだが、翻訳出版界の大立者、華の
あるカリスマ的存在だった。

—それより何より、わたしにとつては、この
業界に送り出してくれた大恩人だ。十数年前、
力も実績もない駆け出し訳者に、仕事を紹介
してくれ、「ビッグになれよ」と肩をたたい
てくれた。事あるごとに励ましてくれた。

—あるとき、夕方にくらつと社長室へ顔を出
したら、いつものコーヒーではなく、「取つて
置きのやつがある」と、おいしいスコッチが
出てきた。それ以来、タトルへは、いつも夕
刻を狙つて行くようになった。

—高級ホテルのバーに引っ張つていかれたこ
ともある。「翻訳者は、酒の味がわからないと
だめだ」と、そこに並んでいる十数種類のバ
ーボンを、ふたりで全部飲み比べた。

—お互い、へろへろになって、「やっぱし、タ
ーキーがいちばんうめえな」などと、回らぬ
舌で納得し合った。

—口べたでぶつきらぼうな三下訳者と、本気
で付き合ってくれた。アメリカカイズされた
ビジネス感覚と浪花節が同居している人だつ
た。とても寂しがり屋で……。

—享年五十三歳。早すぎる。恩返しするいと
まもなかった。

—ああ、さびしくなつちまうなあ。黙祷。